

観音物語(7) 最高峰に立つ

わくざいしゅみぶ いたにんしよすいだ おんびかんのんりき によにちこくうじゆう
 或在須弥峰 為人所推墮 念彼観音力 如日虚空住

或は須弥峰に在って 人の為に推し墮されんにも 彼の観音の力を念ずれば 日の如くにして虚空に住せん

雨の登山は黙々と歩むばかりである。前を行く人の足元だけしか目に入らない。うつむいたまま、一步、一步、ひたすら足を運ぶだけである。麓の森林地帯では鳥の囀りを楽しみながら歩けるけれども、緑陰を通り抜けてしまえば、殺伐とした岩肌の崖である。

やっと頂上が近くに迫った。濡れた岩に足が滑る。強風の雨が横からも下からも吹きあげて、頂上が見えたり隠れたりしている。うつむいている顔が濡れる。リュックの重さが恨めしくなる。尻餅をついて、あわや頂上の真下で大怪我をするところであった。激戦の末、党首に当選した三年前が思い出されてくる。〈よくここまで頑張ってきたものだ〉

党首は須弥山の頂上に立った。下界を眺める気分は最高である。ここにたどり着くまでは、ひたすら雨と岩と疲労との戦いであったが、須弥山に立てば、視界が急に開ける。これまでの苦しみがいっぺんに吹き飛んでしまう。〈当選したときは大勢に祝福を受けたものだ〉

山頂の気流がおもしろい動きをしている。吹きすさぶ風が、濃霧を舞いあげ、帯状になって頂上から反対の谷へ激流している。冷たい疾風が肌に突き刺す。山頂の西側は眺望抜群のパノラマ風景。東側は視界ゼロ。紺碧と濃霧のさかいに党首が立っている。〈あの霧の中を登ってきたのか…。就任二年を過ぎたころから、党内の雰囲気がおかしくなってきたな〉

須弥山の猛烈な風は西から東に流れている。いま登ってきた溪谷は濃霧の下である。三千メートル級の絶壁には風をさまたげるものがなにもない。風圧によって体がふらつく。疾風がまともにぶつかってくる。しっかりと岩にしがみついているなければ、谷に吹き飛ばされてしまう。〈なぜか、このごろ怪しげな中傷が多い〉

ここから二百メートルほど先に鼻天狗岳がある。その頂上に数羽のカラスが止まったり、飛んだりしている。カラスは風の流れるのって気持ちよさそう。〈風流だな…〉

カラスは霧のなかへ消え、そして霧のなかから出てくる。須弥山を境にして、東は霧に包まれているが、西は眺望抜群。夕陽が眩しい。気流がカーテンのように激しくくねっている。霧のくねり方がおもしろく、しばらく頂上から連峰の風景を眺めて楽しむ…。〈ああ、のどかだなあ〜〉

カラスがクワーと一声して天空に舞い上がり、ふたたび霧のなかへ急降下していく。そして霧から突如として黒い姿をあらわす。〈なんと、ダイナミックなことか…〉

党首は岩にしがみつきのながら、天空をわがものにしてカラスに苦笑している。最高峰に立てば落ちるだけである。党首になれば、あとは退くしかない。どのように退くかが今の課題である。須弥山の谷底を覗き込みながら、落ちるということを党首はしみじみと空想している。〈糾弾されてポストが奪われることは世間ではよくある。自分にツギがまわって、人に褒められて、そこに慢心が起きれば、突き落とされる。当たり前だよな。どのように退けばいいのだろう…〉

クワー、クワー、クワー…。須弥山の上空で二羽のカラスが霧のなかへ揃って急降下した。〈面白いな…〉

党首には、黨員たちと心を揃え、常に謙虚であることがいかに大切であるかを、二羽のカラスが教えているように感じられた。周囲は虎視眈々と弱点を狙っている。深い断崖を覗いていると、椅子を奪おうとしている輩の顔が見えてくる。意見に耳を傾けずに意地を張っている自分の根性も見えてくる。謙虚さに欠ける点が思い出され、黨員が従ってくれない原因も浮かんでくる。これまでの慢心や強要などを、須弥山の岩にしがみつきのながら党首は反省している。〈ふむ…。ふむ…〉

今、党首は大観音の足元で瞑想しながら、住職の和訳観音経を傾聴している。「須弥山の絶頂に立っていて、ここから谷底へ突き落とされたとしても、墜落のさなかに観世音菩薩を念ずれば、まるでお日さまのように身体が虚空にポッカリと浮かぶことができる」

須弥壇にお供えしてある山積みのリンゴが一つ、住職の膝に転がり落ちてきた。リンゴは無傷であった。そのリンゴを瞑想をしている党首の定印の上に載せた。

「私に下さるのですか」

「本日参拝のお供物です」

夕陽のような真っ赤なリンゴを、党首は有り難く額に押し戴いた。